

## 【JCC水産業クラウドWG2013会合議事録】

■日時 2013年04月01日（月） 14:00 - 16:10 IBM箱崎本社

■参加者（順不同・敬称略）

社団法人海洋水産システム協会 研究開発部トレーサビリティ研究会 研究部長

築地魚河岸三代目 千秋 店主

東京海洋大学 海洋科学部海洋生物資源学科教授

三重大学 大学院生物資源学研究所 教授

岩手大学 地域連携推進センター 教授

株式会社ジェイ エスキューブ 市場開発推進部 常勤顧問

SinfoniaCloudテクノロジーズ株式会社 取締役

ネットフォース株式会社 取締役

ミツイワ株式会社 新規プロジェクト本部 常務取締役本部長

ミツイワ株式会社 新規プロジェクト本部ネットビジネス営業部 部長

トスカバノック株式会社 取締役営業部長

トスカバノック株式会社 取締役営業本部長

トスカバノック株式会社 取締役開発部長

ヤマトグローバルエクスプレス株式会社 営業戦略部 経営戦略担当

ヤマト運輸株式会社 法人営業部 係長

ヤマト運輸株式会社 法人営業部 課長

岩手大学 三陸復興推進本部釜石サテライト産学官連携コーディネーター三陸復興担当

岩手大学 東京オフィス 客員教授

経済産業省 商務情報政策局 情報処理振興課 係長

経済産業省 商務情報政策局 情報処理振興課 課長補佐

産業連携ネットワーク事務局

総務省 情報通信国際戦略局 情報通信政策課

総務省 情報通信国際戦略局 情報通信政策課 課長補佐

総務省 情報流通行政局情報流通振興課 事務官

農林水産省食料産業局産業連携課 専門官

富士通株式会社 パブリックリレーションズ本部

ミツイワ株式会社 取締役 事業開発室担当

日本アイ・ビー・エム株式会社 9名

## ■ アジェンダ

	時間(目安)	テーマ	所要時間(分)	スピーカー
1	14:00-14:05	オープニング	5	日本アイ・ピー・エム㈱ 執行役員スマーター・シティー事業担当 吉崎 敏文
2	14:05-14:50	久慈市実証報告	45	日本アイ・ピー・エム㈱ SC事業、テクニカル・ソリューション 高城 勝信 他
3	14:50-15:10	活動報告-1 ミツイワ株式会社様	20	ミツイワ(株) 新規プロジェクト本部 常務取締役本部長 羅本 礼二様 事業研究室長 兼 新規プロジェクト本部 水産流通部長 本多 隆史様
5	15:10-15:30	ゲストスピーカー 株式会社トスカバノック様	20	トスカバノック株式会社 取締役 開発部長 広木 豊久
6	15:30-15:50	Discussion	20	参加メンバー
7	15:50-16:00	ラップアップ・クロージング	10	日本アイ・ピー・エム㈱ GBS、インダストリアル・サービス事業 末次 信治

## ■ 実施概要

### 1. オープニング

(1)WGメンバーの一人である中村先生(東京海洋大学)が急逝され参加者にて哀悼の意を表明いたしました。

(2)日本アイ・ピー・エム㈱執行役員スマーター・シティー事業担当 吉崎 敏文

新入社員は「社会的意義のある仕事」に熱意を感じている : 水産業界クラウドも新しい事業化をして、社会に貢献する事業とした。本WGも1年半やってきた。技術的な検証は済んだと思っている。これからは普及期に入るのでステークホルダーの協業と、ビジネス化促進に向けた政府支援をお願いしたい。

### 2. 久慈市実証報告

日本アイ・ピー・エム㈱ SC事業、テクニカル・ソリューション 高城 勝信 他

(1)総務省の「情報流通連携基盤の水産業界トレーサビリティ情報における実証」の概要報告。

久慈市と山田町で実証を行った(2012年12月~2013年2月末)。安全/安心情報を含めたトレーサビリティ、情報流通連携基盤共通API等の実証等。トレサ実証の対象:久慈市、山田町から東京への魚の直送ビジネス。

(参加者)

地元企業 : 久慈市:嵯峨商店、北三陸天然市場、山田町:JF三陸やまだ

輸送 : ヤマト運輸

東京 : 川崎市のパスポート宮前店、築地の千秋はなれ

有識者会議(前後3回:主査は東海先生)を開催した。

(2)ビデオ紹介、デモ等

ビデオURL :

1. 日経BP IT TREND記事内 <http://special.nikkeibp.co.jp/ts/article/ac0c/140682/>

### (3)関係有識者のコメント

岩手大学：プロジェクトの観察で感じた課題を紹介。「三陸は震災前から衰退傾向。新しい産業を起こす必要がある」と結論

岩手大学：

総務省のトレサ実証事業でシステムはできたが、まだ「価値創造」ができていない。実証は時間も短く、時期も逸してしまった。今後は社会変革にどう結びつけるかが課題。次の事業につなげる努力が必要。

千秋：

産地の食べ方を消費者が知った意義は大きい。千秋でも地元の魚を工夫して提供。生産者と消費者相互に情報を共有することが大切。今回は電話・メールで対応したが、相互の連携を拡充すべき。

海洋大学：

実証で技術的・手順的な課題が明らかになった。魚には地方名がある(「どんこ」の正式名は「えぞいそあいなめ」)。多数のアイテムにタグをどう付着させるかが困難。魚種のコードが統一されていない。総務省に統一のリード役を期待したい。データ入力作業者は「手間、コスト」の他に「鮮度に対する責任」に懸念あり(鮮度は流通過程で落ちてゆくが、情報はそのまま：後工程まで責任持てない)。実証を通じて、漁協も興味を示し始めた。ヤマトとの協業も進んだ。今後も展開を続けたい。

総務省：

実証で多方面の検証がすすんだ。課題も見えてきたので、復興や水産業の活性化に繋げて欲しい。

### 3. ミツイワ株式会社活動報告 (ミツイワ(株) 新規プロジェクト本部 常務取締役本部長 羅本 礼二様 事業研究室長 兼 新規プロジェクト本部 水産流通部長 本多 隆史様)

(1)2010年10月に三重県の「水産振興プロジェクト」に参加

「コンパクト・スマート漁業」への取り組み：テーマは2つ：自然エネルギー活用、ICTを使った新しい流通

ICTをつかった新しい流通：既存流通の「補完」と位置づけている。未利用魚、加工残渣に関して、消費地のプロの人たちに産地情報を流し、取引を活性化するための仕組みづくり。

(2)発見

水産業習慣への理解と地域状況の把握が重要

まず事例を作り、儲かる実証を示す

消費地ニーズ ≫ 産地シーズ

先進性ではなく「やりたいこと」から実現させる、

その他

### 4. トスカバノック様スピーチ (トスカバノック株式会社 取締役 開発部長 広木 豊久様 トスカバノック株式会社 取締役営業本部長 梶田 佳延様)

(1)「一尾ごとの魚にタグをつける」事例

自社はタグ取り付けの専門メーカー

Bmシリーズの紹介：タグピンの製造技術が要

鮮魚、甲殻類へのタグ装着はクリアした：問題は途中の加工過程。いくつかの手段でトレサに対応する方法を検討中

(2)Bm-RFIDタグの紹介

## 5. ディスカッション

### (1)(三重大学)

思いを込めて本WG設立に貢献したが、総務省・IBMの実証事業には声が掛からなかった。海洋大学、岩手大学が参加している中、三重大学が参加出来なかったのは残念。

### (2)(岩手大学)

岩手県も湾内の資源にどう付加価値をつけるかが勝負。ここを高めるビジネスモデルが必要

社会参画の仕組みとしてどう参画していくかというところで、先行されている海洋大学、三重大学さんと一緒にやりたい。社会変革にもってゆくことができれば、上記の背景が似ている三重県にも貢献できるはず

農水省をはじめ、国にもこの社会変革の動きに参加して欲しい

### (3)(千秋)

ミツイワさんの活動に共感する

産地と消費者の間の情報共有を進めてほしい

また、養殖業(ブリ、タイ、ヒラメ、ホタテ、カキ等)からの情報も欲しい。こちらの方が情報はとりやすいはずだが、市場を通すと情報が届かなくなってしまう。

### (4)(海洋大学)

事業化にはコスト負担の問題がある。ブランド魚はクラウド利用のコスト負担はできても、未利用魚や加工残渣ではコスト負担は大きな課題。どうクラウド化するか、要検討。

すり身については、中身(内訳の魚)の情報も重要。

魚に関する情報流通については、農水省にも技術戦略を担ってほしい。三重県は多様な魚が獲れることもあり、技術戦略で亀岡先生、勝川先生の出番が出てくると考える。

### (5)(三重大学)

1月29日に浜松フォトニクスでMEMSのFTIRが開発された。ワインやブドウの栽培に適用を考えているが、漁業にも適用できるはず。タグとの組み合わせで検討したい。最先端技術を水産に取り入れていかないとだめだろう。

### (6)(海洋水産システム協会)

産直はいいが、間に市場が入ると(積換え・ロット変更等があるため)トレサは途端に難しくなる。技術ややり方を工夫しないとけない。トレサは汎用技術であり情報提供だけでなく、安心安全につながる保証をどう担保するか、という視点でも役立つはず。いろんな使い方を検討すべき

### (7)(ネットフォース)

情報と実体との融合を「バリュー・チェーン」の中で実現する必要がある

情報だけでなく、農水省や経産省等にも支援をして欲しい

### (8)(ヤマトグローバルエクスプレス)

宅配便の輸送番号に「商品の中身」の情報を埋め込むことを検討中。タグの番号との連携を検討したい。

宅急便番号を見れば中身が見えるなどは面白いのではないか。

### (9)(農水省)

事業化のためには、消費者が金を払ってくれる付加価値をどう創出するかがカギ。

農水省も現場とICT利用をどのようにつなげるか、悩んでいるところ。是非一緒に考えて行きたい。

(10)(経産省)

ICTの付加価値をどう創出するか、タグについてもどう価値付けをするか、どう現場で使いやすくするか、など引き続き検討したい

(11)(三重大学)

昨日の日経夕刊に、「ICTがわかる人が現場にいない」という記事があった。ICTも壊れる。現場で故障したら、終わりというのでは困る。水産業の現場で、ICTがわかる人を育成して欲しい。これがないと、いつまでも「ITメーカーが儲かるだけ」という現場の考え方が変わらない

(12)(岩手大学)

生産者と消費者(提供者含む)で信頼関係ができれば、産直ビジネスは伸びる。信頼感ができれば、現場でさばいて送るビジネスや、魚を一匹ではなく、部位に分けて売るモデルも考えられるようになる。

(13)(ミツイワ)

産地のプロと消費地のプロによる情報共有が重要。これができれば、小野寺先生の言うモデルも成り立つ

## 6. クロージング(日本IBM)

WG当初は、日本の魚食文化をどう高めるか、どうやって魚価をあげるか、がテーマだった。

今は、事業化、ビジネス化の話がでてきているのは進歩。ミツイワさんの取り組みや課題は参考になる。

ICTはできたので、「次のステージ」に進む時期に来た。どうビジネス化するか、定着させるか、社会変革、社会基盤等につなげるか? 次のステージへの時期がそろそろ来ているのでは。攻めの農水業、TPP等の動きも踏まえる必要がある。

SWG化での取り組み、テーマ、内容、コミュニケーション方法等について、事務局案を作ってメンバーに諮りたい。

ここまでやってきて本音でやりとりできるようになってきたので今後の形もご賛同いただけるようであればご相談したい。